

こう づき

⑭高月地区(山都町)

- ◆農家戸数 26戸
- ◆農地面積 66.1ha(うち20.7haは水田)



月いづる里の挑戦 ～若人に繋げる農地をみんなの力で～

[中山間農業ビジョンの概要]

集落の課題(現状)

- 耕作放棄地の増加
- 農業後継者がいない
- 有害鳥獣による農作物被害が多い



目指す将来像

- 農業で生活ができる収入の確保
- 若者が多く、子供の多い集落
- 有害鳥獣の農作物被害の防止
- 地域資源を生かした活性化



具体的方策

- 農業で生活ができる収入の確保
 - ・農地集積、基盤整備、機械設備共有化、小ネギの導入、米直売
- 若者が多く、子供の多い集落
 - ・後継者育成、空き家活用による移住促進
- 有害鳥獣の農作物被害の防止
 - ・耕作放棄地の解消、牛などの放牧、罟設置の増加
- 地域資源を生かした活性化
 - ・地蔵88体の活用、フットパス、販売所設置など

[ビジョン策定のプロセス]

ビジョン策定以前

◆条件不利地、高齢化、後継者不足、鳥獣被害の増加により、個人では農地の維持管理が難しい状況である。

◆平成27年3月、「人・農地プラン」を策定。さらに、その実現に向けて、同年4月、「高月の明日を考える会」を設立

中山間農業ビジョン地区支援事業へとつながっていった

農事組合法人の設立

◆平成28年4月、地域の農地は地域で守ることを基本理念に、19名の農家で「農事組合法人高月」を設立した。

◆影響を受けたのは鹿北町の農事組合法人「結の里浦方」。「地区全体の理解を待っていても自分たちのエネルギーが持たない」。最後はリスクを背負うリーダーの決断力だと学んだ。



農業ビジョンの策定

◆平成30年度、中山間農業モデル地区支援事業の指定を受け、農事組合法人高月が地域の核となることを位置づけた。

◆平成30年7月～平成31年1月に6回開いた検討会には、地元・町役場職員・県職員が来て、指導。

◆山形大学地域教育文化学部の楠本健二先生の指導でワークショップを実施。
◆数多くの意見が出たが、課題は下記の3つに集約された。

- 耕作放棄地が増えている
- 農業後継者がいない
- 有害鳥獣による農作物被害が多い

課題認識の深まり

◆高齢化により耕作放棄地が増え、有害鳥獣が繁殖。耕作放棄地の近くの田畑はエサ場として集中砲火を浴びている。獲っても個体数が減らない。しかも農業後継者がおらず、対策する人手が足りない。

◆高齢化、耕作放棄地の増加、鳥獣被害の悪化、後継者不足による対策作業の不足。これらの悪循環が続いているのである。

⑭高月地区(山都町)

月いづる里の挑戦 ～若人に繋げる農地をみんなの力で～

[具体的な取り組み 計画と取組現状]

成果目標(令和3年度):①アスパラガスの作付面積を30a増加 ②環境保全型農業の取組み面積を2haまで拡大

1. 農業で生活ができる収入の確保

◆農地集積、基盤整備、機械設備共有化、小ネギの導入、米直売

- ◆平成29年、水稻210a、里芋20a、ニンニク10a、合計240aでスタートしたが、3年後、令和2年3月計画では水稻560a、里芋30a、ニンニク30a、粟125a、小ネギ20a、ミニパプリカ5aで合計770a。作付面積は約3倍に増加。
- ◆小ネギは平成30年度でハウス整備(20a)、平成31年度に栽培開始。令和2年3月から収入が見込め、同年4月から雇用開始の予定。
- ◆コンバイン、トラクター、田植機など各種農業機械を共同購入。

2. 若者が多く、子供の多い集落

◆後継者育成、空き家活用による移住促進

- ◆令和2年4月より、農事組合法人高月で男性を1名雇用する。
- ◆Iターン・Uターン者は多く、古民家カフェなどを経営する人はいるが、移住して就農する人はまだない。

3. 有害鳥獣による農作物被害の防止

◆耕作放棄地の解消、牛などの放牧、罠設置の増加

- ◆クリの栽培を拡張し、耕作放棄地を減らしたい。
- ◆重機や乗用草刈り機等で耕作放棄地の解消や草刈り作業の効率化を図る。また点在している農地を集団化し、効率的な鳥獣害対策をしたい。
- ◆ハンターが高齢化。イノシシ対策としては、罠の数を増やすしかない。

4. 地域資源を生かした活性化

◆地蔵88体の活用、フットパス、販売所設置など

- ◆フットパスは、地蔵88か所巡りも合わせてコースを作り、観光資源化。
- ◆フットパスのランチと合同で、毎年11月23日に大収穫祭を開催。定員20名が25名に増え、令和2年は30名に増やせないかと相談されている。
- ◆農産物直売所はなし。観光農園は未設置。
- ◆他にもアイデアはあるが、人員が足りないので、着手できない。

[成果と今後の展開方向]

1. 全体的な成果

- ◆3年で作付面積が3倍に増えた分、耕作放棄地は減った。
- ◆地域の農地をみんなで守る気持ちが高まった。その姿が、会社を退職して法人に就職する新規就農者を引き寄せた。
- ◆小ネギの作付はハウスを作り、平成31年度に20aへ。令和2年3月から収入が見込め、人材雇用への期待が高まる。
- ◆トラクターやコンバイン等を購入できた。

◆フットパスおよび大収穫祭は毎年好評で、参加者も増加傾向にある。地域一丸となって、団結力が増した。

2. 今後の展開方向

- ◆新規作物の導入時の栽培技術を確認させる。
- ◆5年後には水田管理はほとんど法人がやることになるのではないかと、後継者は20代2名以外、40～50代以上。